

「技術革新と歴史が調和する中国」

2-A 神田外語大学 池田千夏

訪中前、私が抱いていた中国のイメージは、急速な都市開発によって生まれた高層ビルが立ち並ぶ未来的な風景でした。普段、メディアを通して目にする中国は、膨大な交通量や急速なビルの建設の様子で、どこか無機質で冷たい印象でした。中国はここ数十年で急速に経済成長を遂げ、世界第二位の経済大国としての地位を築いているため、中国の都市部は最先端技術に満ち、効率的で便利な生活が営まれていることが想像できます。一方で、中国が誇る数千年の歴史と文化がどのように継承されているのかについては不明な部分が多かったため、今回の訪中を通じて中国の歴史を体感し、学ぶことができればと思い訪中に臨みました。

実際に中国を訪れてみると、想像を遥かに超えた街並みが広がっていました。都市部では最新技術が至る所に導入されており、自動化された交通システム、キャッシュレス決済の普及など、想像していた以上にスマートシティ化が進んでいました。夜はいくつもの高層ビルが、煌びやかにライトアップされ、圧倒的な都市のスケールに胸が躍りました。

特に驚いたのは、博物館を訪れた際、最新の映像技術が駆使された展示がされていた点です。また、現代においても、未知の青銅器や歴史的な遺物が発見され続けている点にも驚きました。展示の内容は非常に豊富で、古代の歴史と最新の技術が見事に融合し、一目見ただけでも中国の迫力を感じましたし、より興味を掻き立てられるような内容でした。中国の歴史は数千年にわたって続いており、その豊かな文化遺産は他に類を見ません。最新技術の発展はただ新しい建物やインフラに活用されるだけに限らず、歴史的な価値を持つ文化財の保存や復元にも大きく寄与していることを実感しました。

さらに、現代の都市開発と古代の文化遺産が、ある種の調和を保って共存していることにも感銘を受けました。急速に進化する都市と、その中で大切に保存され続ける伝統的な文化。中国の街並みには、その両者が共存している独特の風景が広がっており、単に最新技術だけに支配された無機質な都市という私の最初の印象は、大きく誤りだったと気づかされました。

訪れる前は、最先端技術によって効率化された冷たい都市というイメージが強かったですが、実際には、中国の文化や歴史を深く尊重しつつも、技術革新と共にその価値をさらに引き出していることが分かりました。中国はただ単に発展を遂げているだけでなく、過去と未来を見事に繋げ、調和させている国だということを、今回の訪問で強く感じることができました。このようにして、中国の真の姿を理解できたことは、私にとって非常に大きな学びとなりました。

最後に、この度の訪中にあたりご尽力くださった日中友好協会、中日友好協会の皆様、貴重な経験をさせていただいたこと、心より感謝申し上げます。上海、成都、北京を巡り、中国の長い歴史と最新技術を目の当たりにしました。また、文化体験や各地の美味しい料理を

通して、中国の魅力を五感で感じることができました。今後も、中国に対する関心を深め、その魅力を多くの人に発信していきたいです。

「実際に見た中国の姿」

2-a 愛知大学 今岡奈南

私は大学で3年間中国について学んできました。しかし、コロナの影響で中国本土に行く機会を逃してしまいました。大学生の間には必ず中国へ行きたいと考えていた時、大学から訪中国の案内をいただき訪中団に参加するに至りました。人生初めての訪中はすべてが新鮮で、日本とは比べ物にならないスケールに圧倒されることが多かったように思います。今回は特に印象に残った三つのことを振り返りたいと思います。

まず一つ目は「食事」です。上海に到着してお昼に訪れたレストランで初めて本場の中華料理を円卓でいただいたのですが、大きなお皿に沢山のご飯が綺麗に盛り付けられたものが着席するや否や次々と出てきて、円卓に乗りきらないお皿をお皿の上に乗せ始めたときには非常に驚き、圧倒させられました。訪中以前から中国ではご飯は少し残すことがマナーであるということは知っていましたが、想像以上の量に驚きました。実際に訪中した間に食べきれたことはありませんでした。また、私は中国ではお茶が普段から良く飲まれる印象があったのですが、レストランでは毎回炭酸飲料が置かれていました。北京で日中の若者が集まるレセプションに参加した際にエビの水煮をいただいたのですが、日本人がエビの殻を皿の上に置いていたのに対して、中国人は殻をテーブルの上に直接置いていて、実際に文化の違いを感じました。

二つ目は「建物」です。初日に訪れた上海の夜景では日本では見たことがないほど輝いた建物がずらっと並んでいました。また、バスの中から見数多くのビルやマンションは全く同じデザインのものでずらっと並んでいて、見事な景色でした。バスの中にいた集合体恐怖症の子は「ずっと建物を見ていられない」と言うほどのものでした。何気ない日常の風景からも日本と中国の違いを知ることが出来ました。今回の訪中では都市の風景を見たので、次に訪中する際には農村や観光地ではないローカルな中国を見てみたいと思いました。

三つ目は「列」です。北京の故宮博物院を訪れ、トイレに並んでいた際に後ろから来た中国人の方々が次から次へと横入りをしてきました。最初は驚きましたが、訪中していた数日の間にレジやトイレの場面で列を抜かされることが何度もあったので、中国はせっかちな人が多いのか、または中国の社会状況がこういった状況を引き起こしているのか、など自分なりに考え、興味深くなりました。

私はこれまで大学で三年間中国について勉強をしてきて、中国の良くない面も良い面もある程度知った上で訪中したのですが、そういった先入観は置いておいて私はただ漠然と中国好きだなーと感じました。訪れた場所で出会う中国人の方々はのびのびとされていて、みんな一人一人が素直に生きている感じがしてとても素敵に感じました。日本にいと中国のことはメディアでしか知る機会がないため、悪いイメージや先入観をもちやすいと思います。そのため、私たちのような若い世代がメディアの偏った情報ではなく、ひとりひとりが中国にもっと目を向けて考えていくべきであると考えます。今回の訪中により、最近はし

ていなかった中国語をまた勉強して現地の方々と話してみたいという思いも生まれ、中国語学習のモチベーションにもつながりました。また、今回訪中団というかたちで会うことが出来た生まれも育ちも異なる素敵な仲間に出会えたことがこの訪中団での一番の財産です。そして私自身、中国を専攻して勉強している身として日中関係が明るくより良い関係を築くためには何が出来るか考え、模索し続けたいと思います。

改めて、私たちに貴重な機会を与えてくださった日中友好協会の皆さん、現地のガイドさん、スタッフさんに感謝しています。今回の訪中団は私の人生を変える一週間になりました。本当にありがとうございました。

「目で見て肌で感じたりアルな中国」

2-A 明治大学 鶴澤佐記

今回の訪中団に参加する前の私の中国に対する考えや印象は、長い歴史や豊かな文化(食文化を含む)、人口の多さといった何となくのイメージであり、どれも教科書で見た事、テレビで見たものに限られていました。そしてメディアによる報道から、現在日中関係は長い歴史の中でもかなり難しい局面にあり、両国の心象は良くないものであると思い込んでおり、中国が「隣国」であり、日本と長い友好の歴史があることを感じる瞬間はあまりありませんでした。

そのため今回訪中団に参加することで、凄く遠く、そして自分には繋がりのないと思っていた中国が実際はどんな国なのか、文化なのか、人々なのか、を直接目で見て肌で感じることで、自分が持っている印象の真偽を確かめるだけでなく、何となく他人事であった中国を身近に考えることで、今後の人生を変えたいと思いました。

実際、今回の訪中によってガラリと印象が変わったもの、驚いたことがたくさんあります。その中でも大きくわけて3つを紹介させていただきます。

まず1つ目は、町が清潔であり、整備されていることです。私が過去に見た事のある報道では、急激な人口増加や経済成長によって大気汚染や街中のゴミ問題の発生、整頓されていない雑多な街並みが広がっているように報道されていました。

しかし今回実際に上海、成都、北京どの都市を訪れた際も、整備され美しい街並みが印象的でした。どこを見てもゴミが落ちている箇所や大量の自転車が放置されている場所などは見つからず、車と自転車が走りやすいように整備された道には花も植わっており、中国人の意識の高さと心配りを感じました。そして何より、日本中、そして世界中探しても見つからないようなユニークな形のビルが本当に数多く建設されており、中国人の弛まない努力と想像し挑戦する力の凄さを感じ、バスの車窓からみる景色に常に心踊っていました。

こういった清潔さは街の治安にも大きく関係していると感じており、女性が1人で夜出歩くことが出来ることや、スリやひったくりに警戒しながら観光する必要のないことなど、低い犯罪率の成立にも関与していると考えました。

2つ目は本場の中華料理の美味しさです。

日本で食べる中華料理とは全然別物と言えるほど、調味料やスパイスが効いた美味しい料理の数々に感動しました。また、円卓で10品を超える料理を提供していただけることへの感謝と同時に、大人数で食事をとることの楽しさも再確認しました。行程中は常に初体験の連続だったため、行く先々での感動や料理の美味しさを食事の場で共有することができ、個人旅行では叶わない楽しさを味わいました。

3つ目は中国人のお人柄についてです。

日本人が抱く中国人のステレオタイプには、「常のにぎやか」、「せっかち」といったような

ものがありますが、実際に接してみてもそういった一面を持つ人は一部います。しかし、それ以上に中国人に共通すると感じたのは「親切さ」です。交流をした中国人大学生やお店の店員さんなど、関わりを持った中国人は皆さん、中国語の出来ない私に対して、「何が言いたいんだろう」、「何を伝えたいんだろう」と汲み取る姿勢を常に見せてくださって、私の拙い意思表示でも理解してくださいました。このような私が出会った中国人の親切さは、積極的にコミュニケーションをとりたいと思わせる大きな要因でもあり、今後中国語を勉強することで、14億人もの人々とスムーズにコミュニケーションをとれるようになりたい、と思うきっかけにもなりました。

今回の訪中で、中国に対する気持ちやイメージは180度変わり、人生の中でも大きな変化が生まれたと感じています。

今回貴重な機会をいただき目で見ても肌で感じたリアルな中国について、家族、友人、その周りの人々にも伝えて、日中の友好の輪を大きくしたいと思います。

最後に、このような本当に貴重で一生物の体験をさせてくださいました、日中友好協会を始め、関わってくださった様々な方に心より感謝申し上げます。

中国について知る

2-A 東京海洋大学 金子未夢

7日間の訪中を経て、私は中国という国をいかに知らないかということに気付かされた。

私は日常的に Xiaomi 製のスマートフォンを使って生活しており、服は度々SHIEN で購入する。娯楽として原神のゲームアプリで遊び、TikTok を見ることもある。高校の世界史の授業では中国史について学び、テレビを付ければ（不穏ではあるが）中国の動向について報じたニュースが頻繁に流れている。このように、中国という国は私にとっては身近な存在であり、「仲は悪いが文化的交流は盛んな国」という印象をもっていた。

しかし、訪中団への参加が決まり、いざ訪中してみると、日本と中国の違いに驚くことばかりであった。キャッシュレス化が進み、自販機やガチャガチャまでもがモバイル決済のみの対応である。スマートフォン一つで全てを済ませることができるため、今回訪れた各地の施設では右手にスマートフォンを握っているだけの恰好で歩いている現地の方もいて、現代の中国の便利さを感じた。

また、現地で交流した西華大学と北京第二外国語大学の学生たちとは、交流会後も共通する趣味である日本の漫画や原神について WeChat で話したり、Weibo のファンコミュニティの使い方を教えて貰ったりしている。正直、私は訪中前に「中国では Google や LINE が使えないらしい」という情報は聞いていたものの、実際に中国人がどのようなツールを使っているのかは知らなかった。日本で言う LINE に相当するものが WeChat であり、Google 検索は Baidu（百度）、Twitter は Weibo（微博）、YouTube は Bilibili（哔哩哔哩）…といったように中国には様々な独自のサービスがあることを知った。この訪中をきっかけに中国の学生が使うツールについて多くの知識を得たと感じる。微博と哔哩哔哩については私も中国でアカウントを作り、帰国後の今でも楽しんで見ている。

現地のガイドの方々や中日友好協会の方、交流した大学生からは、他にも中国では交通量を抑えるために車のナンバーで規制がかかるということや、大学受験の過酷さ、大学生活の様子など、中国での生活にまつわる様々な話を聞くことができた。それらに驚き、関心すると同時に、日常的に中国発のコンテンツを使い、中国に関するニュースを見聞きしていた私が、中国の人たちが普段どのように学生生活を送り、仕事をし、買い物をし、食事をしているのか、何も知らなかったことに反省した。

今回の訪中は、このような発展したインターネットツールやキャッシュレス化の様子、上海訪問時に見た超高層ビルの数々や煌びやかにライトアップされた夜景など、現代中国のハイテクさを存分に感じられると同時に、三星堆博物館や万里の長城、紫禁城といった中国四千年の歴史を感じられる旅であった。中国語もままならない状態で臨んだ訪中団であったが、今回の旅を通して、中国についてもっと知りたいと思うようになった。また機会を作って、中国を訪れてみたい。

最後に、今回このような貴重な機会をくださった友好協会の皆さんやお世話になった方々

に感謝を申し上げるとともに、今回の経験を大切に、日中友好の今後につなげていきたい
と思う。

「多方面から見た中国と日本」

2-A 法政大学 久保田雄賀

1 日目

センタービルでは普段見ることのできない展望台からの景色を見ることができた。上からの景色を見ながらガイドを受けることで、上海という街がどのようにできたか知ることができた。また夜のナイトクルーズでは日日友好を深めることができ、以降の交流を進めやすくすることができた。またセンタービルから見た景色とは違う視点から街をみて上海という街への理解を深めることができた。

2 日目

上海博物館では様々な歴遺物を見て、地域による違いや粘土による違いから中国の壮大さを感じることができ、1日の始まりを迎えた。実は予約者のみの展示場であった数字展に、スタッフの粋な計らいで入れていただくことができた。そこには映画並みの全方向アニメーションが繰り広げられており、まるで歌舞伎のような伝統芸能を見ているような気分であった。個人的に上海博物館に行った際にはいくべき展示場の1つであると思う。1日の終わりに上海から成都に向かったが、日本から上海への航空時間よりも長いこと中国の広さを実感できた1日であった。

3 日目

ジャイアントパンダをガイドの人とともに見ることでパンダへの新しい知見を得ることができ、パンダのような生活を送ってみたいと思った。また中国でパンダがどれほど重要視されているのか分かった。午後は三星堆博物館に訪れ中国の昔の風習を知り、また三星村考古探索体験を通して理解をさらに深めることができた。

4 日目

いよいよこの旅のメインである西華大学生との交流をした。予想以上に日本語ができていたので交流しやすく、またジェスチャーも伝わりやすかったので多くのことを学ぶことができたと感じている。中国では日本に来る外国人が困るように英語が通じないことが多かったのも、訪日する人の気持ちを感じることができ英語の学習意欲が高まることにつながった。1日の終わりに北京に移動した。上海と成都はいい意味でイメージとは異なる街であったが、北京はそうはいかなかった。空気が汚く周りの友人ものどを痛めている人が多かった。

5 日目

中国伝媒大学に訪問した。アルコールの摂取量による自分の許容量の研究と子どもの本のリサイクルの研究を聞いた後に中国伝媒大学の成り立ちについて話を聞かせていただいた。研究内容にも感銘を受けたが、それ以上に通訳している女性の方に目が行った。留学しているとはいえ約1時間もの間大勢の前で通訳し続ける姿が非常にかっこよく、自分も他

国との懸け橋になってみたいと思わせてくれた。

6日目

この日は2つの世界遺産を訪れた。万里の長城では長く平たい道が続いているイメージであったが、そこにたどり着くまでに大変な労力を必要としていることが分かった。また1段1段の高さが異なっていて上りづらく様々な思考が張り巡らされていることが登りながらでも分かった。故宮博物館ではガイドの説明を聞き、中国の昔の王様がどのように暮らしているのか肌で感じることができた。

7日目

同仁堂会社では中国由来の漢方を間近に見ることができ、また試飲等もできた。燕の巣が多く使用されていることに気づき、ガイドの方に聞いてみるとそもそもレアであることとタンパク質が多く含まれているため漢方によく使用されているようだ。羅紅美術館では実際に撮影したとは思えない写真を見ることで世界の広さを理解するとともに好奇心をくすぐられた。また要所要所に様々な技巧が建物に加えられており、美術館自体がアートであった。

総括

今回の訪中で中国と日本を多方面から見ることができ大きな財産になったと感じている。今回の経験を活かして中国以外の国とも交流して世界をより有効な関係にもっていきたいと考えるようになった。

「生活文化の違いから垣間見える中国人像」

2A 横浜市立大学 櫻田 満優香

はじめに

日常的にテレビのニュースで中国のことを耳にする機会はあるけれども、それらに強く関心を持っていたわけではなかったが、この訪中を経て日本に帰国後、中国に関する情報により敏感になったように感じる。訪中前の私の中国に対するイメージは、関心も強くなかったため社会主義国であることや中華料理を特色としていること以外に知識はなく、特に悪いイメージも持っていなかったように思う。だが、主に生活面での日本との文化的違いに特に関心を持ったため、そのことについて具体例を挙げたのち考察を述べようと思う。

日本と中国の文化的側面での違い

中国に着いて最初に思ったことは、大人数で食卓を囲む際には円卓を使うということだ。ユーチューブで見たことはあったが、実際に使ってみると中心部分が回転することにより遠くにあるお皿を自分の近くまで寄せることができるとも便利だと感じた。また、日本に比べて箸の先が太く使いづらいと思った。後で調べてみたところ、米や豆など比較的細かいものを食べる日本の箸は先が細くなっている一方で、円卓の中心にある料理を取り分ける必要のある中国では箸の先が太くなっているようだ。次に感じたのが荷物検査の多さである。日本ではどこへ入るにも大抵荷物検査を要求されることはないが、中国では空港のみならず博物館や美術館でも荷物検査があった。このことについても調べてみたが、テロや組織的犯罪を防ぐために必要としているためであることが分かった。また、今回の訪中での移動手段にバスが主に使われていたが、バスに乗っている際にも感じたことがある。それは運転手のクラクションを鳴らす回数が多いことである。これに関しては一見とるに足らないことのように思われるが、意外にも日本と中国の考え方の違いが出ていることが分かった。日本でクラクションを鳴らす際には多くの場合、迷惑であるというニュアンスが含まれるが、中国では自分が通ることを相手に知らせる意味である場合が多く、クラクションを鳴らされても日本のように否定的にとらえる中国人は少ないようである。最後に中国で生活を通して感じていたことであるが、トイレトペーパーを水に流すことができないことが大変不便だと感じた。滞在中トイレトペーパーに問題があるのか下水道に問題があるのか気になっていたが、実際のところどちらにも問題があり、水圧が弱くトイレトペーパーの品質が悪いため、水に流してしまうと汚水が逆流するといったことになってしまうようだ。アリペイなどの便利な決済手段があったり、電動バイクなどハイテク技術は存在するのにトイレトペーパーは流すことができないということが個人的に疑問である。

生活面での相違を踏まえた考察

電子決済が公民全体に浸透していたり、電気自動車が広く普及している一方で、トイレットペーパーをトイレに流すことが不可能であるなどの技術面で先進的である部分とそうでない部分が大きく差が開いているのだと体感した。また、一つの政策を浸透させることが容易である点が社会主義の利点であるのだなと思った。今回の訪中には来年しようと思っている留学先の検討要素となることを期待して参加したが、期待以上のものを得ることができ、訪中を手助けしてくださった多くの方には大変感謝している。

「悠久の歴史から垣間見えた文化の深層」

2-A 上智大学 首藤愛美

古来よりアジアの文化に多大な影響を与えてきた国を訪れることで、より広い視野で世界を捉える。これを目標として今回の訪中団に参加したが、実際にたくさんの発見と収穫があった。私は普段から大学で中国からの留学生と交流する機会もあり、今回の訪中によって中国に対する基本的なイメージが大きく変わることはなかった。しかし、今回の旅を通じて、中国という国の解像度は格段に上がったと感じている。

今回の七日間で最も強く実感したことは、「現在を創っているのは土地と歴史である」ということだ。旅程においては、各地の遺跡や博物館、そのほかにも各地の様々な名所を訪れ、また現地の人々との交流や食生活の体験によって、豊かな歴史と文化に触れることができた。その中で、現代中国の社会経済システムや、そこで暮らす人々の風習や価値観は、この広大で多様な風土と、数千年に渡る複雑な歴史を背景に形成されてきたのだと感じる場面が多々あった。

一例として挙げられるのは、旅の中で印象に残った場面の一つである宴会での料理の量の多さである。中国の文化として、食事を多く提供し、完食しないことが礼儀とされることもある、といった情報は事前に頭に入れていたものの、米粒一つ残さず食べるように教えられてきた日本人の私にとって、大量の料理が供され、完食されることなく宴会が終わる光景を目の当たりにすることは大きなカルチャーショックだった。「そういう文化だから、ここではそういうもの。」と一口で終わらせてしまえばそれまでだが、こうした文化の背景には、中国の豊かな土壌や、「饗す」ことに対する価値観の違いがあることに気付かされた。積み重ねてきた歴史の重みはその土地で生きる人々の生き方に大きく影響するのだと、文化の違いを肌で感じると同時に、自分自身が日本という土地に根ざした価値観を強く持っていることも痛感した。このような、大陸国家である中国と、島国として発展してきた日本の比較は大変興味深かった。

中国に生きる人々の優しさと豊かな感情表現に触れたことも印象的だった。14億もの人口を抱える国で、一人ひとりがそれぞれ自己表現の方法を持っていることは非常に興味深いものであった。現地の学生との交流や、各所での偶然の出会いを通じて、温かく、人間性豊かな国民性を直に感じる事ができた。また、中国独特の洗練された美的感性には各所で圧倒された。数千年前の遺跡に施された繊細なデザインが、現代にも通じる美しさを保っていることに深い感銘を受けた。また、訪れたどの街も花に溢れていたことも印象的で、華やかで美しいものを重視する感性が現代の都市計画にも活かされていることを実感した。歴史とともに洗練されてきた中国の美的感覚は世界的にみても唯一無二のものだと思うが、その感性が現代にも脈々と受け継がれていることの尊さに触れることができた。

一週間という短い時間で実施された今回の旅は、中国という国を理解するにはほんの第一歩にすぎない。しかし、ここに記したように、文化や社会が確立された背景を考慮しながら他国の文化を眺めることができたことは自分自身にとって大きな収穫となった。あらゆることからは、様々な要因が複合的に積み重なって形成されているということを念頭に置きながら、中国に限らず、世界全体を眺め、捉える姿勢を貫いていきたいと強く感じるきっかけとなった。

「実際に見ることで、考え方は変わる」

2-A 和歌山大学 白川 知幸

私は今回の訪中を通して、さまざまなことを学んだ。中国の長年の歴史や発展している産業、進んでいる学問を肌で感じることで、良い刺激を受けることができた。

私が印象に残っている点を大きく2つに分けた。まず1つ目は、環境についてである。現在、世界で地球温暖化が進んでいるという問題が大きくなっている。そこで、多くの国が地球温暖化の進行を抑えるために、二酸化炭素などの温室効果ガスの排出量を減らす動きが進んでいる。その中で、中国は電気自動車や電動自転車といったものを多くの国民が利用している。国民が利用している自動車の約3分の1が電気自動車ということに驚いた。街中を見ていると、電気自動車のナンバープレートを付けている車や電気自転車の多さを実感することができた。電気自動車のナンバープレートは無料で発行されるなど政策で電気自動車への誘導を行っている。また、ガソリンで動くバイクの利用が禁止されている地域があるということに驚き、地域規模でも二酸化炭素の排出を抑える動きが進んでいることが非常に良いと感じた。温室効果ガスの排出を抑える動きとして、再生可能エネルギーの利用が拡大させているということも挙げることができる。上海や成都、北京などの都市部ではあまり見ることがなかったが、ガイドの方の話を聞いている中で広大な面積を誇る内陸部や海上を利用して太陽光発電や洋上風力発電などが盛んに行われているということを知った。持続可能な開発目標(SDGs)の達成期限が2030年と掲げられている中で、中国が行っている温室効果ガスを抑える動きは学ぶことが多くあると感じた。

2つ目は、歴史のあるものが現在も多く存在しているということである。上海博物館や三星堆博物館には多くの展示物があり、その数に圧倒された。また万里の長城や故宮博物院など非常に大きな建造物を自らの目で見ることができたことはとても良かったと感じている。その中でも、印象に残っているのは万里の長城である。訪中する前から興味はあったが、実際に見て歩いてみることでさまざまなことを感じるすることができた。私の住んでいる和歌山県には熊野古道という世界遺産がある。その熊野古道を歩いていると先人がつくり上げてきたこということをとても感じるができる。そして万里の長城を歩いていく中で、同じ感じ方をしたのだ。その2つの共通点は、どちらも修復工事が行われている中で先人がつくり上げてきたものを尊重していることである。万里の長城を歩いてみて、階段を上っていく中で歩みにくさを感じた。観光客をただただ増やそうとするのであれば、道は平たんでスロープなどを付けると良いだろう。しかし、階段の段差も1段1段違う。そのことにすごく心を打たれた。歴史のあるものや建造物を大切にすることの大切さやそのことによって人の心を動かすということがとても心に残っている。

今回、6泊7日で中国を訪れた。そこで多くのことを学ぶことができた。これからの人生で、この経験を活かせるようにする。

「～中国で一週間過ごしてみての学び・気づき～」

2-A 青森中央学院大学 相馬颯人

1日目は、初めに、上海センタービルを見学しました。雲より上まであり、ビルとしてはものすごく高く少し曇っていましたが、上海を一層することができ、日本とは違う建物の作り、住宅マンションの多さにびっくりしました。初めて食べた中国料理は味が薄く、または、辛いか甘いかの2種で、少し口に合いませんでした。夜の黄浦江クルーズでは、夜の綺麗な上海の街を船の上から見ることができ、とても感動しました。

2日目は、上海博物館は、中国四大博物館の1つで、中国4000年の歴史を学ぶことができました。午後は、急遽上海ディズニータウンを散策できることになり、パーク内に入ることはできなかったが、ストアや周辺のショップをめぐり、日本とは違うディズニーを感じました。

3日目は、成都パンダ繁育研究基地を訪れました。パンダを数十体見ることができ、親子シーン、動いているシーン、寝ているシーンなどを見ることができ、パンダの生きる姿を間近で見ることができました。午後は、三星堆博物館へ行き、特徴的な顔つきの青銅器や、黄金に光っている仮面などを見ました。その後、オリジナルの置物を作成し、博物館で様々なことを学びました。成都での火鍋は思っていたよりも辛くなく、とても食べやすかったです。

4日目は、西華大学を訪問し、日本語学科の学生の皆さんと一緒にゲームをしたり、中国の伝統工芸である漆うちわづくりを体験させていただいたりして、言語の壁を越えた交流を楽しみました。その後、西華大学の皆さんと一緒に食事会をしました。交流会中のステージでは、日中それぞれの学生が母国の文化を披露し、お互いの国の文化への理解を深めることができました。出会うことのない学生の皆さんと交流でき、とても素敵な時間でした。

5日目は、中国伝統文化体験では、私たちはモザイクアートづくり体験をしました。小さいガラスやプラスチックの破片を合わせて絵を作り、想像を膨らませて、オリジナルの作品を作りました。ここでは個人の想像を深める良い場面だと思いました。その後、北京伝媒大学を訪問し、学生や先生の発表を聞きました。北京伝媒大学に留学している日本人の学生もいて、それぞれどのような考えをもっているのか、なぜそのように考えているのかということから自らの頭で考えることができました。夜は、訪中団ではない他の団体を含め、500人規模の歓迎晩餐会がありました。私は初めてこのような食事会に参加でき、この規模で食事会をすることは日本でもあるのかなと疑問に思いました。

6日目は、初めに、万里の長城を登りました。足場が険しくとても登るのに体力をいりましたが、登った先から見た景色は絶景でした。昼食を終え、故宮博物院・紫禁城を訪れました。かつての皇帝やその側近たちが過ごした場所を順に巡り、スケールの大きさに感動しました。

7日目最終日は、同仁堂会社を訪れ、様々な漢方を見たり飲んだりすることができ、ました。私はちょうど喉を少し痛めていたのですが、漢方を飲んだところ、喉によく効いた気が

しました。中国の漢方は効き目が早いと感じました。網羅美術館では、自然の写真を鑑賞し、見ることのできない様子なども写真で抑えられていました。中国は技術が発展しており、写真の感度・精度が日本より何倍も優れていることにとっても感動しました。

私は、この訪中団を通して、中国の歴史・工芸を学ぶことができたり、教科書などで見ていた世界遺産の万里の長城や紫禁城を実際の手で見ることができたりし、様々な体験ができました。また、中国の学生たちとゲームや漆うちわ制作、食事を共にしたことで、出会はずのない学生たちと交流することができ、良い思い出になりました。私は今回が初海外で、初海外が訪中団の一員として訪れることができたことをとても誇りに思います。とても濃い1週間にすることができました。この訪中で学んだことをこれからの生活で活かし、未来へと繋げていこうと思います。

「人生を変える1週間」

2-A 茨城大学 立川陽菜

今回の訪中国での経験を経て、印象に残っていることは大きく5つあります。

1. 高層ビル、交通について

中国に着いて、まず驚いたことは日本と異なる街並みです。超高層ビルが立ち並び、道路は片側4車線が続き、多くの自動車・バイク・自転車が走っていました。東京にもビルは並びますが、中国の方が遥かに高いです。それだけでなく、中国のビルは形も様々でした。特に印象に残っているのは CCTV のビルです。メビウスの輪を建物にしたようなその形は、どの角度から見ても美しかったです。さらに、SOHO ビルの形も印象的です。丸くて可愛い形は、まるで未来都市のようでした。

2. ご飯

円卓を囲んで本格的な中華料理をいただきました。最初は見たことのない野菜や、初めての味や香りに戸惑いもありました。また、都市によって味付けも異なり、中国の広大さを感じました。1番戸惑ったのは、ご飯の量です。量がとても多く、料理を残してしまうことに罪悪感がありました。しかし、レセプションで夕食を共にした中国の学生に聞いてみると、このくらいの量はよくあるし、残しても問題はないと教えてくれました。逆に、その学生は日本の料理は量が少ないと言っていたので、知らないことによる戸惑いはお互いにあり得るのだと感じました。

3. 歴史

今回訪れた場所は、博物館や世界遺産など、中国の歴史を感じられる瞬間が多くありました。中国の歴史は映画作品などを通して少しだけ知っていましたが、実物を見て、そのスケールの大きさに驚きました。例えば故宮博物館では1つ1つの建物が大きく、歩けば歩くほど、最初に見た光景の感動を塗り替えていきました。故宮博物館の中の、今回行けなかった場所もいつか訪れてみたいです。

4. 中国人大学生

西華大学、中国伝媒大学、北京第二外国語大学の学生との交流がありました。日本語を学ぶ学生に、どうして日本語を選んだのか聞くと、日本のドラマやアニメが好きだから、という声が多くありました。私もアニメが好きなので、覚えてたの僅かな中国語で好きなキャラクターなどについて話すことができました。日本のアニメ文化が世界に広がっていることを実感し、感動しました。私は大学で日本語教育について勉強しているので、日本に興味を持ってもらうきっかけを知ることができて良かったです。ここでの気付きは、日本での大学

生活で役に立てたいと思います。

5. 日本人大学生

班の学生とは、8月の事前研修で会っただけで出発当日まではLINEでしか交流していませんでした。しかし、出発してから急速に仲を深めることができました。私は中国語があまり話せず、挨拶程度しか咄嗟に出てきません。そんな私を助けてくれたのは、周りの多くの日本人学生です。私の日本語を中国語に訳してくれたり、中国語を日本語に訳して教えてくれたりして、言語の壁を低くしてくれました。また言葉だけでなく、中国の文化や、美味しいご飯について、we chat や Alipay の使い方など、あらゆる事を教えてくれました。この訪中団では日中交流はもちろん、日々交流も果たすことができました。

6. 最後に

中国に行く前から、大学にいる中国からの留学生とよく話をしていたので、中国について知っているつもりでした。しかし、それはほんの一部で、実際に行って感じることや得るものは計り知れないと感じました。たった1週間の訪問でしたが、多くのことを吸収できたと思います。これをきっかけに、中国についてもっと勉強したいと感じました。大学生活は折り返していますが、残りの大学生活、さらには社会人になっても中国との交流を続けて行きたいと考えています。

「この訪中でのご縁を大切に」

2-A 福岡女学院大学 野村夢実

今回の訪中は私がコロナ禍に留学して帰国後、はじめて中国に戻りました。前回の中国はコロナ禍ということもあり、思うような留学生活を送ることが出来ず、また現地の方々との交流も少なかったです。しかし今回の訪中を通じて、コロナ禍とはまた違った新しい中国の姿や理解を深め、日中の架け橋に少しでもなればなと思い参加を決めました。

私たちはこの七日間で上海、四川、北京の三都市を回りました。上海では経済の中心でもある上海中心センターや100万ドルの夜景とも称される外灘の夜景をクルーズに乗って鑑賞することが出来ました。中国のスケールの大きさに圧倒されるとともに、私も将来ここで働きたいと強く思い、これから頑張ろうと思いました。四川では本場のパンダを見ました。私たちは幸運にも数十頭ものパンダを見ることが出来、また日本から帰国したパンダにも再開することができました。パンダはその日の体調によってお客さんの前に出すか決めるため、少しシフト制のような感じで、私もパンダのように寝て食べてを繰り返す生活を送りたいと感じました。三星堆遺跡では中国の古蜀時代（約5000年前）の貴重な青銅器や青銅人頭像などが展示されている博物館を見学させていただきました。近年発掘された三星堆は現在も調査中であり、これまでの中国の歴史を覆すかもしれない大きな発見だと知り、これからますます中国のことが気になります。大昔にどのような技術であれほど繊細な銅器などを作ったのか目が離せません。また本場の四川火鍋を体験し、私は比較的辛いのは得意でしたが、四川の火鍋は全然食べれませんでした。しかし現地の方の食文化を体験でき、とても貴重な思い出となりました。北京では二大世界遺産でもある故宮博物館と万里の長城へ行きました。紫禁城は思っていた100倍も大きく、昔の皇帝は移動がどれだけ大変だったのだろうか心配してしまいました。万里の長城は階段の幅が色々あり、思っていたよりも急斜面で、降りるときは手すりを使って一步步つゆっくりと下がりました。

私がこの七日間で一番印象に残っているのは四川省の西華大学での現地の学生との文化交流でした。参加された学生は日本の文化やアニメが好きな日本語学科の学生と、校内のボランティアの生徒たちでした。私たちは7対3で日本人生徒と中国人生徒でグループになりました。最初はとても緊張して、どうやって交流すればよいのかわかりませんでした。しかしながら中国人学生が私たちのためにいくつかのゲームを用意してくれ、みんなでお題を完成させながら、自然と日本語や中国語を混ぜながら交流していくことが出来ました。ゲームの後には中国の伝統的な漆扇子を中国人学生が教えてくれながら作りました。できた作品はほんとにきれいで、とても良い文化体験が出来てとてもうれしかったです。

また、中国伝媒大学での交流会では中国の学生の日本の企業での成果の発表や、大学内の博物館の見学をさせていただきました。中国は大学も非常に広く、校内でもバスや電動バイクに乗っていて、新鮮であり、改めて中国の国土の広さを実感させられました。

私にとってこの一週間の旅はあっという間で、留学の時よりも現地の方々の文化や、生活、本当の中国を知れたのではないかと考えています。出発した時よりも中国のことを好きになりました。テレビや政治面で日中関係が危ぶまれる中、私は国民同士は実はそこまでお互いを悪く思っていないと思います。同じアジアであり、隣国同士の日本と中国はこれからも切っても切り離せない関係だと思います。団長が言っていたように、「日中の平和なしでは、アジアの平和なし、アジアの平和なしには、世界平和なし」のように私もこれから日中関係改善に少しでも力になれるよう尽力していきます。

最後になりましたが、改めて今回の 2024 年度日中友好大学生訪中団第 2 陣を支援してくださいました、中国政府、中国人民友好協会、中国日本友好協会の皆様、日中友好協会事務局の皆様、そのほか関係者の皆様にお礼申し上げます。そして一週間共に過ごした 2 A の皆さんありがとうございました。このご縁を大切にまた皆様と会える日を楽しみにしております。

「ピクニック」

2-A 神田外語大学 星川翔梧

訪中団として参加した1週間はまるでピクニックのようだった。

私は中国語を専攻しているので、大学で中国語に触れるチャンスは毎日至る所にあっただけでも、中国語にのめり込んで取り組むことなく、また語学以外の分野でも面白さを見出す工夫もしてこなかった。

なので大学生活で語学を始め異国の文化や歴史への理解が身につくことはなかった。

しかし、金曜ロードショーがある度に繰り返し観た『少林サッカー』や祖父と観たジャッキーチェンやブルースリーの映画が大好きだったこともあり、旅行で中国を訪れてみたいという気持ちはずっと抱いていたので、今回の訪中団のチャンスには無我夢中で応募した。

上海-四川-北京へと移動をする際に毎回必ず飛行機を乗り継いでの移動となった。飛行機好きの自分にはたまらなく嬉しかった。また、どの行き先でもバスガイドさんが愉快で耳を傾けたくなる案内をしてくださり、その際に車窓から見える景色は数えられないほどの大きくて絢爛なビルだったり、大行列を成したバイクだったり、GDP1位のアメリカに匹敵する経済力・広大な土地・14億人を超える圧倒的な人口の多さといったスケールの大きさを常にさまざまな場面で感じられた。

ホントに贅沢なのは毎度食べ切れることがなかった食事。大きな円卓の上に食べても食べても埋め尽くすほどの料理が次から次へと運ばれてきて月餅や胡麻団子、ライチの入ったエビチリ、北京烤鸭やデザートのスイカはどの食事の際でも振る舞ってもらえた。中国の方も普段こんな食事を毎日する訳じゃないよと食事の際に同席した現地の大学生が教えてくれたので、中国側の日中友好に対する並々ならぬ意気込みを感じると同時にこのような歓待を受けることはもてなされた側の胸に穏やかでほのぼのとした感情をはっきりと残すのだなど訪中を終えて1週間経っても感じている。

1週間ともに中国で過ごした仲間は私にとってとてつもなく大きな財産となった。

訪中団のメンバー編成は今でも気になる。

普段はAI研究を行っておりゼミの教授が中国にルーツがあり、その訪中団の団員の方との知り合いで訪中団へのきっかけを掴んだ者だったり、中国の歴史を研究しにきてる者だったりバックグラウンドがさまざまだった。

それで良かった。それが良かった。

たくさんの刺激を受けた。

同部屋になった友人は毎回夜寝る前にその日に起きたハプニングや体験したことを語って

くれたが、ハプニングへの捉え方や同じ体験をしてもそういった視点もあるのかと聞いて感じた。楽しくて仕方がなかった。

訪中国を終えて今考えていることは今後も必ず海外に行こうと。

それは1人であれ、グループであれなんでも行こうと。

また中国にも必ず訪れることに決めた。万里の長城はもう一度登りたいし、料理も恋しいが1番は今回受けた中国の方からの温かな眼差しや歓迎があったからだと思う。それをもう一度受けたいので自分も周りにはいる中国の方にあたかな振る舞いを施したい。

ピクニックのようなあつという間の1週間だった。

「歴史と文化の織り成す景観 多元的で多様多彩な中華文明の歴史遺産」

2-A 東海大学 山崎桜翠

今回の訪中団では上海、成都、北京の3都市を訪れそれぞれの地で中国の料理などの文化や歴史、現在について触れ学ぶことができました。また、成都では西華大学、北京では北京伝媒大学の2つの大学を訪れ現地の大学で学ぶ学生や留学生とふれあうことができました。今回の訪中団が私の初めての訪中であり、ずっと行ってみたいかった中国の初日の上海浦東空港の地で初めて中国の地に立った時にこみ上げた感動と思いは忘れることができません。

私は大学で東洋史特に中国の歴史や文化を学び皇帝の諡号をはじめとした中国の歴史的文化を研究しています。中国で訪れた歴史的遺産、旧蹟は上海では四大博物館の一つ上海博物館、成都では異形で個性的な遺物が有名な三星堆遺跡、北京では呂氏春秋にも名のある天下第一雄関と名高き居庸関を擁する居庸関長城、そして明王朝の永楽帝から清王朝最後の皇帝である宣統帝溥儀までの明清24人の皇帝が君臨し500年中華王朝の中心地として繁栄した紫禁城・故宮博物館を訪れました。

上海博物館は上海市にある博物館で四大博物館（或いは故宮博物館、南京博物館とともに三大博物館）に数えられる博物館で殷周王朝・先秦時代の青銅器や玉器、秦漢や南北朝、宋遼金元朝などの時代の印章や貨幣、唐代の唐三彩、明清期の絵画や陶磁器などの焼き物などが展示されています。中でも私が上海博物館で見ることができてよかったと思うものがいくつかあり、三国時代の魏の虎牙將軍印章や西晋時代に晋朝に帰順した氏の酋長に贈られた晋歸義氏王印、南朝齊の武將王僧虔（征南將軍、司空、諡簡穆）の六面印、良渚文化など中国新石器時代に作成された玉琮や玉璧などの玉器、唐代に隆盛した唐三彩などが印象に残っています。また中国の先秦時代から現代にいたるまでの五銖錢や太平天国聖宝、解放区貨幣・革命根拠地貨幣といった貨幣の展示なども見ることができました。

成都では三星堆遺跡・三星堆博物館に行きました。三星堆遺跡は中国文明のうち長江流域に栄えた長江文明のうち現在の四川省一帯の巴蜀地域にさかえた巴蜀文化「古蜀王国」の遺跡で当時は古蜀王国の中心地だったのではないかとされています。三星堆からは青銅器をはじめ金器や陶器、玉器なども出土しており中でも青銅器は特徴的なものが多いです。三星堆を代表する遺物はいくつもあり中でも青銅縦目仮面（或いは青銅縦目面具）は三星堆を代表する青銅器です。青銅縦目仮面は世界最大の青銅仮面で目の部分に円柱状の突起があるのが特徴です。またほぼ同一のものとして青銅戴冠縦目仮面がありこちらは仮面にゼンマイのような巻雲状の飾りがありこれは冠に相当するものとされています。青銅縦目仮面の発見は古蜀の伝説に出てくる神（古蜀王国初代王）の伝説の根拠の一つとなり、神話上の存在とされた古蜀王国が現実にあった証拠になりました。古蜀にはかつて蚕叢・柏灌・魚鳧の三人の王がいたとされそれぞれが王朝を開き数百年君臨したという伝説がある。この伝説の最初に出てくる蚕叢は四川の歴史書である華陽国志のなかで初代蜀王は縦目であったとあり

この縦目が青銅縦目仮面の造形であり青銅縦目仮面は蚕叢であるとされた。このことが考古学的に古蜀の存在の裏付けとなったとされます。また三星堆では青銅縦目仮面の他にも全高4メートル近い中国の伝説上の巨木である扶桑樹の像とされる青銅神樹（通天神樹）や全高2メートル以上で古蜀王国の高位階級の祭祀官や占術官をかたどったとされる精緻な紋様が彫り込まれた青銅立像、魚紋や鶏のような鳥の紋様の彫られている金杖、祭祀に用いられたとされ二股に分かれた形状が特徴的な玉璋なども見ることができ三星堆遺跡、古蜀王国の独創的で精緻な文化と技術力、他に類を見ない信仰や生活様式を見ることができました。北京では居庸関（居庸関長城）と故宮博物館（紫禁城・北京順天府）を訪れました。居庸関は北京市昌平区にある史跡で万里の長城の中で最も内側にある関所です。居庸関長城のルーツは戦国時代の燕国にまでさかのぼることができ、「天下第一雄関」「天下九塞 居庸其一（呂氏春秋）」と呼ばれた難攻不落の城関で始皇帝による長城の統一や漢王朝の時代などに整備されました。現在の形になったのは明王朝の時代で東の山海関や西の嘉峪関などと同じく北のモンゴルや女真族の防波堤となりました。今回訪れた際は居庸関の西の端に相当する第十二敵楼まで登りました。また故宮にも訪れました。故宮または紫禁城は、明王朝の三代目皇帝永楽帝が元の大都の宮殿跡を大規模改造して整備した中国の宮殿で南京応天府から遷都し、明王朝と清王朝の二つの王朝の都の中心となった場所です。古故宮では映画ラストエンペラーでも印象的な朝礼（登基）のシーンの舞台となった太和殿をはじめ劇中のラストなどで印象的に描かれた玉座や「建極綏猷」の額、昭徳門や故宮の南門の午門、東門の東華門、北門の神武門などを見ることができました、また午門からは中国のランドマークでもある天安門、紫禁城からは明王朝最後の皇帝崇禎帝と王承恩殉国の地である景山なども望むことができました。

今回の訪中で中国の多元的で個性的な歴史文化とそれら悠久の歴史に彩られた中国文化に触れることができました。また、現地の西華大学や北京伝媒大学に訪れ学生と交流し互いに親しむことができました。今回の訪中で得た経験や知識見分を自分の今後の東洋史の研究や勉強に活かし文化や伝統、歴史を通じた日中友好と受け継がれてきた歴史文化を後世につたえる力にしていきたいです。1955年に作られた「東京—北京」という曲の中に「手と手を取り合って我らは高らかに歌う」という歌詞があります。日本と中国がこれからの未来でも手と手を取り合って協力しどんなに困難の中でも堅い友情と末永い友好を結び続けることを強く願っています。

「授業では知り得ないこと」

2-A 神戸市外国語大学 山田ひかり

今年の六月末、大学のウェブサイト上にこの訪中団に関するお知らせが掲示され、参加希望者は翌日指定の教室に集合するようにと書かれていた。私はてっきりそこで説明会のようなものがあるのだろうと勘違いし、参加は未定だが話だけ聞いてみようという軽い気持ちでその教室へ向かったのだが、なんと特に説明はなくその場で応募が確定してしまった。そしてよく考える間もないまま、私は中国へ行くこととなった。そんな成り行きで参加が決定した訪中団で、私は非常に多くのことを学んだ。これまで中国学科として中国の言葉や社会、文化について大学で学習してきたが、実際に中国に行ってみると、授業では教えられなかったようなものばかりであった。

訪中団の七日間で特に印象に残っているのは、中国のデジタル化である。現地のガイドさんが「中国人は出かける時にスマートフォンだけを持って行く」と言っていた。スマートフォンが財布や家の鍵の機能を果たすかららしい。この話を聞いて私は現金を人民元に両替しないことにした。中国では例外なくどこでもキャッシュレス決済が利用できたので困ることはなかった。中国の交通事情についても様々なことを知った。成都では環境のためにバイクが禁止されており、代わりに電動自転車を使用されていること、北京では渋滞緩和のためナンバープレートの数字による規制があること、シェアサイクル用の自転車が至るところに置かれていて、道路には自転車専用レーンがあること等は、日本にいたら知る機会がなかったかもしれない。また、本場の中国料理は日本で食べる中華料理と随分違っていた。私は辛いものが苦手なので中国での食事について心配していた。しかし、上海にも四川にも北京にも、私がおいしく食べられるものはあった。辛さよりも、料理と共に飲まれる飲み物が甘い炭酸飲料か温かいお茶しかないことのほうが私にとってはつらかった。日本のレストランで季節問わず冷たい水が出てくるのが中国人からすると不思議なのだという話を聞いて、カルチャーショックを受けた。

上述のように日本と中国の違いを感じたことも数多くあるが、人に関してはむしろ中国人も日本人と変わらないのだという印象を受け、意外だった。例えば上海博物館で私が展示を見ていると、中国人の男性二人組に英語で「どこから来たの?」と話しかけられた。私が拙い中国語で「日本から来ました」と返すと、「中国語話せるんだね!」とすごく嬉しそうにしていた。彼らも片言ではあったが日本語で「こんにちは」と言ってくれ、私もすごく嬉しかった。成都のジャイアントパンダ繁殖研究基地では、日本人も中国人も関係なく、パンダのかわいさに夢中になっていた。基地内のショップで私がパンダのグッズを持って立っていると、中国人に「それどこにあったの?」と二度も尋ねられた。西華大学や中国伝媒大学の方々、各地のレストランの店員さんたちは、私たちを暖かく迎え入れもてなしてくれた。このように、外国人が自分達の言葉を頑張って話してくれることを嬉しく思ったり、パンダをかわいいと思ったり、客人を精一杯もてなしたいと思ったりするのは、中国人も日本人も

同じらしい。私は中国で反日感情を持つ人に危害を加えられることはないだろうかと少し不安に思っていたのだが、危害どころか、日本人だからと嫌な顔をされることすら一度もなかった。中国人に対して良くない偏見を抱いているのは私のほうであると、深く反省した。今回の訪中を通して、この身で体験すること以上の勉強はないと感じた。自分の目で見て自分の耳で聞くことで、教科書を読んだり人の話を聞いたりするだけでは知り得ないであろうことをいくつも知ることができたからだ。そして、現地の中国人たちと触れ合うことで自分の中にあった偏見を正す機会にもなり、中国という国が以前よりずっと好きになった。いつかまた中国を訪れるときは、より多くの人と関わって、より多くのことを吸収したい。そのために、これから中国語学習に更に力を入れていこうと思う。

「実際に中国を訪れてみて」

2-A 関東学院大学 山部愛依

私が七日間中国を訪問して感じたことは偏見に囚われ、自分が実際に見ていない、体験したことが無いのに物事を自然と判断してしまっていることだった。中国を訪れる前まではテレビで見た情報や SNS での情報のみで中国を分かった気になっていた。そのため中国に対して気が強い人が多い、せっかち、町が汚い、食べ物が不衛生といったマイナスなイメージばかりを感じていました。しかし訪中団で中国に実際に行ってみて中国の雰囲気、印象は大きく変化した。

私がこの 7 日間で出会った中国の人々は全員が親切でした。世の中では日本人＝親切という認識が根付いているため、自分も日本人だけが異常に親切なのであると考えていた。しかし実際はバスガイドさんをはじめ、飲食店、コンビニで働いている人、街中の人、交流した大学生も親切で中国語が全く話せない、分からない私たちに一生懸命寄り添ってくれていた。そこで私は気づかぬうちに偏見の目で中国を見ていたことに気づいた。実際に自分が中国に行ったわけでも、何か中国の人にされたわけでもないのに勝手に悪い印象を持ってしまっていた。私だけが中国に対して悪い印象を持っていることでもないということは私が出国する際にも、帰国した際にも感じたことがある。私は現在祖父母の家で生活をしている。その際に祖母から中国は危ない国だから行くことを心配されたことがある。普段から祖母は国産であることにこだわっているため、海外に対して偏見を他の人よりも持っていると思う。帰国してお土産を渡そうとしても食品は怖いと言われてしまった。加えて祖父も中国は危なかっただろう、汚かっただろうとマイナスなイメージを口にしていた。私はその祖父母の行動や言動に違和感を覚えた。今までの私のように祖父母も実際に自分自身は経験したことがないのに分かったようなことを言っていた。特に若者よりも中高年の人の方が中国に偏見を強く持っていると思う。私たち若者は最近だと中国人のアイドルが沢山いるなどのことから中国に対してマイナスな宿見を抱いていることは少ないと思う。決して中国に興味が無いわけでもないのだ。私が中国の写真を SNS にアップしたところ中国に関しての良い感想、好意的なコメントがいつも以上に届いた。中国に偏見を持っているのではなく、行っている人が少ないから中国がどんな国なのか分からないという印象を持った。メディアで中国を見てしまうと政治的に見てしまうので、中国の魅力を知ってもらうには身近な若者が発言している SNS 情報が効果的であると考えた。私が中国に行くと話した時も若者と大人では反応が大いに違った。私はこういった偏見の目が日本人に多いからこそ中国の良さが日本国内に伝わっていないのだと感じた。このような日本国内の偏見を無くしていくためには実際に中国に行ってみることが大切だと私は感じた。実際に中国に行き、中国の人と交流してみて初めて今まで自分が知らぬ間に持っていた偏見に気づくのである。実際に自分の目で見て判断をする、自分の今までの考えを見直すという経験ができたことは私の人生にとってとても貴重であり、必要不可欠な経験であったと思う。日本人の多くの

若者が実際に中国に行く機会を増やし、実際に見て感じてもらうこと、それを発言していくことが大切であるとの訪中を通して感じた。

「初めて中国に行って感じたこと」

2-A 明海大学 渡邊優衣

私は、中国語学科の学生でありながら一度も実際に中国に行ったことがなく、頭の中のイメージでしか中国という国を理解できていませんでした。しかし今回、訪中団の団員として初めて中国を訪問し、中国の知らなかった多くの部分に触れ理解を深めることができました。私は訪中にあって自身の中国語力を試したい、現地の大学生と交流し、相互理解を深めたいという意味を持っていました。

初日に訪問した上海では、上海タワーを見学し、黄河のクルージングを体験し、上海博物館を見学しました。上海タワーでは、中国で最も高い建物であり、その高さに圧巻されました。黄河クルージングでは、上海ならではの未来的な都市景観を楽しむことができました。上海博物館では、まず展示物の多さに驚きました。その中でも、青銅器のコレクションは世界的にも有名で、中国の青銅器の歴史的な発展を体系的にみることができ、当時の職人技術の高さを感じることができました。そして、上海で使われる中国語は方言なまりが強く標準語とはかなり違いがあり、まったく聞き取ることができませんでした。この気づきから、標準語だけを学び理解するだけでなく、その都市ならではの方言も理解していきたいと思いました。食事に関しても、上海では甘めの味付けのものが多く、「中国の食事＝辛い味付けが多い」という私の概念が大きく変わった部分の一つです。

続いて訪問した成都では、パンダの繁育研究基地、三星堆博物館などを見学しました。日本でも親しみのあるパンダですが、こんなに多くのパンダを見ることができるのはパンダの聖地である成都ならではのということを感じました。三星堆博物館は、特に仮面の展示が印象的で、大きな目や長い耳を持つ非常に独特なデザインだったのが記憶に残っています。記憶に残すだけでなく、この訪問をよい機会に中国の考古学や歴史、文化など自主的に学んでいきたいと考えました。また、西華大学を訪問し現地の大学生と交流をする機会もありました。お互いの国の言語を使いながら交流をすることで、お互い学ぶ言語がより上達するきっかけにもなるのだということを実感しました。そして、日本語を流ちょうに話す中国人の学生を見て、さらに自身の中国語力を高めたいと思いましたし、大学でも、中国人留学生と交流する機会を増やしていければ良いなと思いました。成都の料理もとても魅力的でした。特に、四川料理は独特な辛さと、痺れる感覚でとても新鮮でした。

最後に訪問した北京では、世界遺産でもある万里の長城や、故宮博物院などを見学しました。万里の長城は、テレビ越しでしか見たことがなかったため、その果てしない長さや高さに圧巻されました。観光客の多さもまた、驚きで多国籍の観光客が集まり、世界中の人々にとって重要な場所であるということが感じられました。次に訪れるときは今回上った地点よりももっと高い地点へ登ってみたいと思いました。故宮博物院でもまず、規模の大きさに圧倒されました。広大な敷地にたくさんの建物が配置された景観はとても美しく、歴史の重みを感じることができました。この場所で、中国の皇帝たちが住んで生活していた風景を想像し

ながら見学するのがとても楽しかったです。また、伝媒大学の学生とも歓迎レセプションの場で交流することができました。とても貴重な体験でした。

私は、お互いの国の言語を学ぶこと自体が、互いを理解する第一歩なのではないかと考えています。現代ではとても高い技術の翻訳アプリなどがあるので、一見言語を学ぶ必要はないと感じる人も多いとは思いますが。しかし私は、自分が思っていることを自分で理解して自分の口で話すことで、より深く理解することができるのだと強く感じました。これからも、今回の訪中でのご縁を大切に、中国語の学習にも日々励んでいきたいです。